

憲法九条が  
生きている

# 百里原物語

松原 日出夫

百里原物語

松原 日出夫

## 百里基地反対闘争の小史

1955年 5月 県議会で百里原、百里原反対運動を賛成する決議を行った。  
1955年 5月 基地反対運動が開始。  
1955年 10月 原子炉反対運動が「小川町運動」を中心とした大規模な運動となり、全国的に火種が燃え広がる。  
1957年 4月 延長用地と隣接する山の丘で約700戸で新田開拓モービリ、全国的に火種が燃え広がる。  
1957年 9月 地元住民、基地反対運動を中心に反対して、延長用地を反対。  
1958年 3月 百里原反対運動が、日本で初めての反対運動となる。  
1958年 5月 県民大会で延長用地反対運動が中心となり、全国的に火種が燃え広がる。  
1958年 7月 延長用地反対運動が、土木工事に反対して、延長用地を反対。  
1958年 10月 延長用地反対運動が、土木工事に反対して、延長用地を反対。  
1959年 3月 延長用地反対運動が、土木工事に反対して、延長用地を反対。  
1959年 12月 延長用地反対運動が、土木工事に反対して、延長用地を反対。  
1960年 2月 延長用地反対運動が、土木工事に反対して、延長用地を反対。  
1961年 8月 延長用地反対運動が、反対運動として、延長用地を反対。  
1964年 10月 延長用地反対運動が、反対運動として、延長用地を反対。  
1965年 2月 延長用地反対運動が、反対運動として、延長用地を反対。  
1965年 6月 延長用地反対運動が、反対運動として、延長用地を反対。  
1966年 2月 「百里原反対運動」の大義原定式  
1976年 2月 百里原反対運動（水戸地区）の土地所有権を譲り受けた。百里原反対運動は、百里原反対運動（水戸地区）の土地所有権を譲り受けた。  
1977年 2月 「百里原反対運動」の大義原定式  
1978年 9月 百里原反対運動は、反対運動として、延長用地を反対。  
1981年 5月 「百里原反対運動」の大義原定式  
1987年 12月 百里原反対運動は、反対運動として、延長用地を反対。  
1994年 4月 百里原反対運動は、反対運動として、延長用地を反対。  
1990年 4月 百里基地での毎日新聞の百里原反対運動をめぐる特集

## 日本国憲法 第9条

① 戦争の放棄、軍隊及び武装擧措の禁止  
② 国の自衛権は、正義と秩序を保護する爲め平和の維持により、日本は二度と戦争をしてはならない。  
③ 戦争の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使をして放棄する。

④ 戦争をめぐる問題については、永久に和平によることを保祐する。

## 基地を拒み続ける意志

「戦争の放棄、軍隊及び武装擧措の禁止」により、日本は二度と戦争をしてはならない。しかし、戦争の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使をして放棄する。戦争をめぐる問題については、永久に和平によることを保祐する。

百里基地反対同盟  
百里基地反対連絡協議会



## 百里のお稻荷さん

百里基地の誘導路を「へ」の字形に曲げさせている平和公園に、お稻荷さんが祀つてある

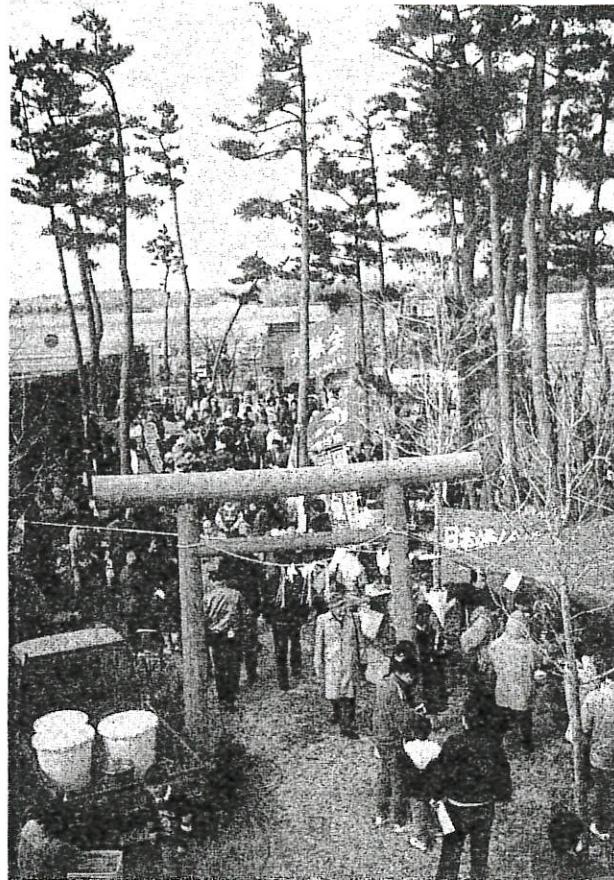
へというよりも、お稻荷さんを祀つてある土地が平和公園になったのであるが▽

このお稻荷さん（百里稻荷神社）は、基地反対運動のなかで祀つた神様である。もう四十年近い歴史をもち、毎年おこなわれている初午祭は、百里基地反対運動の年中行事になっている。

最初の頃の初午祭は、旧暦一月の最初の午の日であったが、途中から変更して一月十一日に催すようになっている。

初午祭は、百里の運動のひろがりと、新暦の休日に変更したことによって、年々参加者が増えて、いまでは、四、五百人の人が集まるようになっている。催しものの内容も、お稻荷さんのお祭りというよりも、どちらかというと、平和運動の「新春の集い」といったような色彩がこくなっている。

四十年という歴史は、神社としてはきわめて短いものであるが、しかし、このお稻荷さんを、百里原に祀つたときから、かかわってきている人は、いまでは、地元の小川町でも数少なくなってしまっている。まして地元以外の人たちは、そのほとんどの人が、百里のお稻荷



百里稻荷の初午祭

さんの歴史を知らずに「初午まつり」に来ているのではないだろうか。

百里のお稻荷さんは、基地反対闘争とともに、波瀬（はらん）に満ちた道を歩んできたのである。

## 神頼み

一年前のことだが、百里の初午祭に協力する団体の代表が集まって、初午祭の準備の相談をしたときのことである。

その年の初午祭の意義だとか、スローガンなどの、むずかしい相談がすんで、話は当日のプログラムへと移った。

「以前は、最初に全員で、お稻荷さんに頭を下げて参拝をしたのがなあー。最近はそれをやらなくなってしまった」

私は、なれば提案のつもりで口をひらいたのだが、しかし、だれからも反応はなかつた。いや、反応がなかつたというよりも、あつたというべきなのだろうか。

「松原さん、神頼みですか？」

司会者が笑つたのである。もちろん、嘲笑ではなかつた。いきなり予想もしていなかつた言葉がとびだしたので、とまどつて笑つたようだつた。

「そうだよ、神頼みだよ」

私は、ちょっと氣負つたようにいったのだが、その後の言葉は、のみ込んでしまつた。

会議の参加者が、百里稻荷の古い歴史については知らない人ばかりだったので、ここは「神頼み」論を、ながながとつづける場ではない、と気が付いたからである。

その年の初午祭も、四百人近い人たちが集まつて盛況であった。

私は、御神酒でいい機嫌になつて、するすると、初午祭りが終わつた後の反対同盟の「辻苦勞さん会」まで居残つてしまつた。

その席で、川井さん・岡部さん・私の間で、つぎのような会話が交わされた。

「初午も永いな、何年になるだろう」

「そう、四十年ちかくなるな」

「大雪のときはもあつたな」

「あのときは、たつたの六人で初午祭をやつたのだ」「と、すると、初午祭の無欠席者は、あのときに参加した者以外にはいなといふことになるのだな」

その大雪のときの初午祭には地元でも、岡部・松原と、いまは亡き高塚明さんの二人しか参加していないのである。

「おれは、別の年に一回抜けているな」と岡部さん。

「おれも、一回出られなかつた年がある」と川井さん。

という話になつて、三十数年の間、一回も欠かさず初午祭に参加しているのは、私だけだということが、このときわかつたのだった。

そこで、私は、その記録の更新にいささかの責任を感じていたのだが、その私も、今年は病に伏してあえなく欠場となつてしまつた。これで、もう、この世のなかには（少しおおげさかな）、百里の初午祭に一回も欠かさず参加しつづけてきた人は、一人もいなくなつてしまつたのだ。

—四十年というお稲荷さんの歴史は、やっぱり永いなあ——と、あらためて思ったのである。

### 講演とやくざ芝居で「遷宮祭」

百里原の一九五八年三月というと――

基地反対の山西きよ町長が誕生して一年。百里原の現地での、仮設道路上の座り込み鬭争からは半年たつている。そして、一ヵ月後の四月には防衛厅百里事務所の投石破壊事件が起り、さらに建設資材の搬入の強行へと、激動の時期に入つていくのである。

この時期、基地建設予定地の北側部分では、防衛厅や西松建設（百里基地建設工事を受注した土建会社）などの動きで、緊張の度が増していくが、基地建設予定地の南側部分は、主として滑走路建設の予定地なので、工事の動きもなく静かであった。

その、南側部分のまん中に、二百人をこえる人たちが集まつていた。近くには舞台が設けられ、露天の店も数店でているという賑わいであつた。

このあたりは、防衛厅が買収した荒れ地となつてゐる土地と、反対同盟員が所有している小松の林がひろがつてゐるだけで、ふだんは人影もほとんどみられないところである。この辺鄙（へんび）なところに、なぜ二百人の人たちが：

愛町同志会と基地反対同盟の人たちで、なかにまじつて支援団体の人たちの姿もあつた。これから百里稲荷の「遷宮祭」がおこなわれるので集まつてゐるのである。

やがて、人びとが待つ中へ、愛町同志会の幹部たちが、小さな社を神輿（みこし）のようにもうけでねり込んできた。社の中には、笠間稲荷から受けた御神体が收められている。社が前もつて予定されていた場所に安置されると、厳かに遷宮祭の儀式がとりおこなわれた。こうして、一九五八年三月三〇日。百里のお稲荷さんが、反対同盟の川井信さんの土地に鎮座したのである。

愛町同志会の幹部たちが集まっている席上で「基地予定地内にお稲荷さんを祀ろう」という相談がもちあがったのは、半年ぐらい前のことだった。山西町長から提案されたのである。

集まっていた人たちは、「お稲荷さんは、商売と農業の神様だから平和の神様だ」と、即座に賛同した。なかには「科学の先端をいく飛行機のパイロットも、意外に縁起をかつぐということだから、お稲荷さんをつぶすのを、防衛庁や自衛隊はいやがるにちがえねえぞ」そんな言葉も飛びだしたりしたのだが。

しかし、山西きよさんや愛町同志会の幹部たちは、神罰や祟り（たたり）をお稲荷さんに期待していたのではない。基地反対運動の守り神としての、心のよりどころを求めて、お稲荷さんを祀る気になつたのである。しかし、それだけではなかつた。お稲荷さんを祀る準備をすすめるなかで、もうひとつの思いがふくらんでいたのだった。

それは、稲荷神社を、同志たちが集まつてくる場にしたい。お稲荷さんが、その「よりどころ」になつてくれるのではないか、という期待であった。

遷宮祭のあと、近くに設けられていた舞台の上で、奉納の催しものがおこなわれたが、「みんなが集まる場にしていきたい」という思いは、すでにこの催しもののなかにも込められていたのである。

奉納の催しものは、奇妙なとりあわせであった。その田玉が、平和団体の幹部の講演と、

与沢地区の青年たちの素人演芸——腰に長どすカッパからげて三度笠——のやくざ居だったのである。

このうちの、講演の方は、「話をきいて基地反対運動に確信をもとうという企画だな」と、すぐに納得がいくのだが、しかし、素人演芸のやくざ居の方は、たんなる余興としか思えない。しかし、この、青年たちの素人演芸にも、山西きよさんら愛町同志会の幹部たちの期待するものがあつたのだ。

もちろん、集まってきた人たちに楽しんでもらおう、ということであったが、同時に、基地反対運動とともに立ち上がっている元気のいいわか者たちの姿を見たら、きっと、みんなの意氣も上がるだろう」という期待だったのである。

そのとおりだった。集まっている人たちは、わか者たちの芝居にヤンヤの手ばたきを送つていたが、それには、若い、頼もしい同志たちへの連帯の思いが込められていたのである。

さて、これだけの話だと、お稲荷さんは、なにごともなく順調にこの地に鎮座したように思われるだろうが、じつは、ここまで漕ぎつけるためにはたいへんな苦労があつたのだ。すべりだしは、けして順風満帆ではなかつたのだ。

## 「やわらぬ神に…」で困ってしまったお稲荷さん

百里のお稲荷さんが鎮座する場所が決まるまでが大変だったのだ。

最初に予定していたところは地鎮祭までやったのだが、その土地が農地であつたために、農地法の規制をうけて「神社を建てる」とはまりならん」ということになってしまったのだ。

遷宮の日は迫つてくる。山西町長らは、お稲荷さんを受け入れてくれる土地を求めて、信戸委員長をはじめ反対同盟の主だつた人たちのところを、つぎつぎと日参したのだが、どこえいってもいい返事はもらえなかつた。

「基地予定地のなかにお稲荷さんを祀る」という総論ではみんな賛成した人たちなのだが、では「あなたの土地に」となるとだれもが『触らぬ神に祟りなし』を決めこんでしまうのだった。

お稲荷さんは、「人間というのは、まったく身勝手なものだな——自分が困つているときや、願いことがあるときは『苦しいときの神頼み』をするくせに、自分にとつて都合が悪いことになると『触らぬ神に祟りなし』で、そっぽを向いてしまう。これじゃあ神さまもやりきれない」と、たぶん、なげいたり、ヤキモキしたりしていただにちがいないが、お稲荷さんとどうしようもなかつた。

暗礁にのりあげたまま、ついに、遷宮祭の前日がきてしまった。愛町同志会の幹部たちは、遷宮祭の延期も考えざるをえない、と半ばあきらめかけたとき、「救いの神」ならぬ「救いの人」が現れたのだ。

——お稲荷さんを祀る場所がなくて、山西町長らが頭を抱えていい——のを知つた川井さん親子（信さんと弘喜さん）が相談して「私の土地でよかつたら」と申し出てくれたのだった。

こうして、ギリギリのところまで追つめられながらも、このときは無事遷宮祭をいとなむことができたのだったが……

数年後に、またまた、お稲荷さんに、ご難が降りかかったのである。

稲荷神社のある川井さんの土地もふくむ、その周辺一帯の土地は、基橋農協の共有地だったのである。区割りをして、個々の組合員に配分されていたので、だれも、そこが自分の土地になると思つて管理してきたのである。ところが、組合内部で「配分のし直し」問題がでてきたのだ。川井さんは、「自分のところには、稲荷神社があるから」と、再配分に反対したのだが、その意見は入れられず、稲荷神社のある区画は、Tさんの配分になつてしまつたのである。

Tさんも、もちろん反対同盟員だったから、稲荷神社も移転せずにそのままにして、Tさ

んの管理にまかせておいたのだが、しばらくたって、とんでもないことが起こってしまったのである。

Tさんの土地から、いつの間にか稻荷神社が姿を消してしまったのだ。

驚いて、山西まよさんと川井さんが、Tさんを聞いたとしたところ、「御神体は笠間稻荷に返し、社は壊して燃してしまった」というのだった。

この頃になると、防衛庁の、反対同盟員にたいする個別切り崩し工作が功を奏しはじめて、反対同盟員のなかに不安と動搖がしだいに濃くなってきた。Tさんも一いつまでも反対運動に足をつこんではいられないぞ。そろそろ身の振り方を考えなければ——と、気持ちが変わってしまったのである。

そうなると、稻荷神社が困った存在になってきた。お稻荷さん付きで、防衛庁に土地を売るわけにはいかないからだ。そこで、そうなる前に笠間に返してしまったのだった。

お稻荷さんは、再び百里原に戻ってきて、こんどは、最初に鎮座したところから北西約百五十メートルのところに遷宮をした。そこは、ちゃんと川井さんに所有権のある安住の地であった。

百里稻荷神社は、平和公園として整備するにあたって、同じ川井さんの土地の中で、もう一度、新築移転をしている。それがいまの社である。

### ばあさま・おつかさまたちの初午まつり

ばあさまや、おつかさまたちが、三三三五五（さんさんさん）百里稻荷にやってくる。

みんな、手に手に重箱の風呂敷包みを下げている。重箱の中には、今日の初午祭のために、前日から、腕によりをかけて作った御馳走が入っている。

百人ちかくも集まってきた。全町の各地で、百里基地の設置に反対してがんばっている基地反対婦人部の会員である。

基地反対婦人部というのは、防衛庁の百里原現地での攻勢や、基地誘致派の巻き返しが激しくなってきた一九五九年に、「いまこそ、女たちががんばらなければ」と、基地の設置に反対する婦人たちで結成された会である。

名称が「基地反対婦人部」なので、百里基地反対同盟の婦人部のように書いている文書もあるが、それはまちがいで、愛町同志会で活動していた婦人たちと、基地反対同盟の婦人たちが一緒になってつくった独立した全町組織である。どちらかというと、愛町同志会の婦人部的な性格をもっていた。

基地反対婦人部は、会員が全町にひろがっていることから、主だった会員でさえ、一堂に

会する」ことがなかなかできず、それが大きな悩みであった。

そこで、思いついたのが、百里稻荷の「初午まつり」だった。「百里のお稻荷さんで会いましょう」と、声をかけあい、誘いあって、集まって来ることにしたのである。

お稻荷さんの社の前の、ばあさま・おっかさまたちが座っている敷物の上には、お煮しめ、煮魚、天ぷら、和え物、お赤飯、稻荷ずし、五目ごはん、などなど、手作りの「駆走」が、ところせましとならんでいる。

その、「駆走」をほおばりながら、山西きよさん、部長の亀山ふささんを囲んだ、ばあさまおっかさまたちの初午祭が始まる。

基地誘致派の強い地区で、その圧力やいやがらせをうけながら、それに耐えてガンバッテいる、若いおっかさまの話には、みんなは涙して耳をかたむけた。男たち顔だけのばあさまたちの奮闘ばなしには、手をたたき、腹を抱えて笑いころげた。

やがて、お神酒の酔いがまわってみると、まつりは最高潮にたつする。

手拭いかぶつて、ばあさまたちが、身ぶり手ぶりよろしく踊りだすと、それに合わせてみんなの手拍子と歌声が百里原にひびき渡った。

こうして、ばあさま・おっかさまたちは、楽しい一日をすごして、明日からのがんばるエネルギーを、体いっぱいに充電して、それぞれの地区にもどっていくのだった。

私たち青年は、この、ばあさま・おっかさまたちの「初午まつり」では、水や敷物などのもてたのである。

私たちにとっても、元気のできる楽しい一日であつたし、お稻荷さんにとっても、最高に満足したおまつりだったにちがいない。

ばあさま、おっかさまたちが主役の初午まつりは数年間つづいた。いや、数年間しかつづかなかつたのだ。

基地反対同盟の信戸元委員長が陥り、滑走路予定地の最後の砦が陥落してしまったことによって、基地をめぐる町の空気は一変してしまったからである。

「みる、おれたちの言つたとおりになつたじゃないか」

基地誘致派は胸をはつた。

「滑走路が出来てしまふのでは、どうしようもない」

基地反対派の人たちは、無念の思いをしながらも、たたかいの矛をおさめてしまった。

こうした流れのなかで、ばあさま・おっかさまたちの多くは、もう初午まつりに来なくなってしまったのである。

百里原とその周辺の婦人たちや山西きよさんらは、そのごも「初午まつり」に参加してきましたのだが、人数も少くなり、以前のように主役にはならなかつた。

このときから「初午まつり」の主役は、基地反対同盟に移つたのである。

## 政府が大騒ぎした「百里タワー」事件

一九六六年の「初午まつり」には、県内や東京からの参加者に加えて、新国際空港の設置に反対してたたかっている千葉県富里の農民たちが参加した。

千葉の富里は、いまの成田に国際空港の設置が決まる以前に、新国際空港設置の予定地として白羽の矢が立てられていた所で、地元農民たちが反対運動にたち上がつていた。その農民たちが、たたかいの先輩格である百里原の農民たちと交流しようと「初午まつり」に参加してきたのである。

このときの「初午まつり」には、百里と富里のたたかう農民どうしの交流のほかに、もう一つ「百里タワー」の完成式という催しが、日玉として準備されていた。

さて、この「百里タワー」であるが…

もちろん、この日のために、前もって立てられていたのである。高塚明さんが、自分の家の裏の竹林から切り出してきた、伸びのよい孟宗竹を組んでつくった、高さ十メートルを越

える竹櫓である。立てた場所は、お稲荷さんのある土地の奥の方（いままる稻荷神社の社の裏）で、誘導路の「く」の字の頂点に一番近い所であった。

初午まつりの参加者たちは、歓声をあげて「百里タワー」の完成を祝つた。

しかし、このときには、「百里タワー」が、後でちょっととした事件になることは、だれ一人として、予想もしなかつたのである。

事件というのは「初午まつり」が終わった数日後から始まる。

まず、百里分屯基地司令（第七航空団が配備される以前の、百里基地の管理にあたつていた自衛隊の司令）が、

「仮設物は、航空法に違反するから撤去せよ」

と、地主の川井弘喜さんに「勧告」してきたのである。

川井さんは、

「自分の土地に建ててなにが悪い。後から百里原に来た自衛隊に文句をいわれる筋合はない」

と、つづねた。

すると、こんどは、赤城防衛府長官名の内容証明郵便が届いた。川井さんは、これもつき返して、拒否の意志を示した。

つぎは、石井光次郎法務大臣名の内容証明郵便だった。

もちろん、川井さんは、これも受け取り拒否でつき返した。

こんなやりとりが繰り返された後の、二月二十五日の夜のことである。『百里タワー』が

忽然（こつぜん）と姿を消してしまったのだ。

翌日になってわかったのだが、石井光次郎法務大臣が、水戸地裁に「竹櫓撤去」の仮処分決定を出させて、人目につかない夜のうちに、執行吏や作業員を動員して撤去してしまったのだった。

彼らは、この作業を誰も見ていないと思ったであろうが、しかし、この泥棒猫のような彼らの行動を、お稲荷さんは、最初から最後まで、ちゃんと見届けていたにちがいない。

「百里タワー」が撤去されたことを知ったとき、私たちは「ふざけたことをしやがって」と腹を立てたのだが、それからしばらくたって、『百里タワー』事件が話題になったときは、

「たったの竹櫓一本で、政府のやつら大きわざをしたもんだ。百里原がよっぽど恐いとみて、取り壊しを夜やりやがった」と、腹をかかえて笑ったのだった。

それは、決して負け惜しみではなかった。

『百里タワー』をめぐる事件で、百里のたたかいが、直接、国を相手にしたたたかいであることを、あらためて確認することができて、それが愉快でたまらなかつたからである。

### 「お稲荷さん淋しかつべ」と大雪でも

大雪の「初午まつ」りがあった。何時のことだったか記憶が定かでないし、記録もなかつたので、図書館にいってその頃の新聞を繰ってみた。一九六七年の二月十二日付の、いはらき新聞に「茨城県地方に大雪」と、十日から十一日にかけて大雪が降ったことを報じる記事があつたので、大雪の「初午まつり」が、このときだつたことはまちがいないとおもう。

その朝、近所の友人岡部さんが「どうしようか」と、初午祭にいくかどうかの相談にきた。外は膝までもぐる大雪であった。日和見根性もでたのだが、相談の結果——お祭りに順延はないから、百里では、川井弘喜さんや高塙明さんらが準備をしているだろう——ということになつて、とにかく出かけることにした。この決断はよかつた。後に悔いを残さずにするようになつたのである。

百里までの三キロの道は難波をきわめ、いつもの倍ちかい時間をかけて百里にたどりついた。予想したとおり、川井さん、高塙さんは、初午祭の準備をすすめていた。私たち四人は、お稲荷さんにお参りをして、その後は、すぐ近くの日本山妙法寺の道場で『雪見の酒』

を決めこんだ。

すると、しばらくして、

「お、ここに居たのか」

と声がして、羽木上地区の羽生幸夫さんという人が姿を現した。

羽生さんは、愛町同志会の幹部で、信戸元委員長が陥ちてしまつた後も、意志を変えずにがんばつてゐる初老の人である。その羽生さんが、この大雪のなか、五キロも歩いて羽木上というところからきてくれたのだから、私たちは恐れ入つてしまつた。

「よく来てくれたねー」

感激して私たちがいうと、

「この大雪では、初午に来る人がなくて、お稲荷さん淋しかつべと思ってよ」

と、羽生さんは笑つた。

ところが、感激の場面は、これだけではすまなかつた。

またもや、外に人の気配がしたので、戸を開けた私たちは「あっ」とおどろいた。そこには、百里弁護団の渡辺良夫先生と、「アジア・アフリカの仲間」というグループの渡辺一夫さんの二人の姿があつたのだ。はるばる東京からやって来てくれたのである。

渡辺良夫先生は、百里裁判のそもそも始まりから、裁判にたずさわってきた執念の人で、百里弁護団の主のような弁護士である。もう一人の渡辺一夫さんは、「アジア・アフリカの

仲間」というグループのなかで最初に百里原の現地調査に参加して、そのグループが、百

里基地反対運動の支援にとりくむようになるきっかけをつくってくれた人である。

「思つたよりひどい雪だったの、こんな時間になつてしまつた」

その二人の言葉には、ようやくたどりついた、という実感がこもつていた。私たちは、その姿に感動しながら二人を迎えた。

大雪の中で「初午まつり」の集いは、わずか六人（川井さんは不参加）であったが、東京からの二人の渡辺さん、羽木上の羽生さんを迎えた多彩な顔ぶれで、百里のたたかいをしみじみと語り合う交流の場となつた。

その帰り道、私と岡部さんは、「今日は、初午に来てよかつたなー。今朝、日和見をおこして百里原に来なかつたら、後で、羽生さんや渡辺さんたちに合わせる顔がなくなつてしまつたなー」と語りあつたのだった。

## 「初午」でなくなつた初午まつり

「百里の初午祭には、最初から毎年参加している」。こんなことをいう人にときどき出会うことがある。そんなに以前から百里に来ていた人ではなかつたり、年齢からいっても、そんな歳でもない人たちからいわれるの、私は「この人、なにか勘ちがいしているな」と思

つていたのだが、ある百里基地反対闘争の年表を見て、その人たちの勘ちがいの原因に合点がいった。その年表には「一九六六年二月、百里初午祭り始まる」と書いてあったのだ。年表がまちがっていたのである。

どうやら、旧暦の初午の日に催してきた「初午まつり」を、途中から新暦の二月十一日に変更しているので、そのときが、最初の「初午まつり」だと勘ちがいをしているようなんだ。  
へあえて「第一回」というならば、一九五八年の鎮座のときになる▽

「初午まつり」を二月十一日に変更するに当たっては、つきのような経緯（いきわたり）と論議があった。

百里原の現地調査がくり返しおこなわれたり、「一坪運動」の地主がふえていくなかで、「初午まつり」の人気も上がり、毎年参加する常連の人たちのなかから、

「友人たちをさそうのだが、平日なので参加が難しい人が多い。なんとか、日曜日に変更もらえないだらうか」

という要望がだされた。

そこで、反対同盟で相談をしたのだが、

「旧の初午の日以外にやっているお稲荷さんはどこにもないだらう」「別の日では、初午祭ではなくなってしままうのでは…」「反対同盟とは関係なく、初午の朝お参りに来て、御供

物を供えていく人たちがけつこういるんだ。反対同盟だけで勝手に変更していいものだらうか」

などの意見が出て、そのときには結論に至らなかつた。

しかし、その「こんどは百里基地懇談会の会議の席で、

「運動を広げるために、日曜日に変更できないか」という要望がだされた。

そこで、反対同盟では再度相談をして、変更する決断をした。変えるのならば日曜日よりも、毎年、月日が固定している休日の方がよいだらうと、二月十一日にしたのである。もちろん、山西きよさんらの了解をえての上なのだ。

しかし、この変更は、神さまが口をきけないのをよいことにして、かんじんの、お稲荷さんの意見をきかず、許可も受けずに決めてしまつたのである。だから、このときにも、「人間どもの身勝手さが、またまかり通つた」と、お稲荷さんは思つたかもしれない。

「初午まつり」が休日になると、東京からは貸し切りバスで参加するようになり、百里の中行事として定着してきた。そして、新しい人たちのなかに百里の運動をひろげていく場ともなつてきている。ここ数年来は、毎回四、五百人にもの人が集うという盛況になつている。

ただ、ちょっと気になることがある。

「盛大になるのは大いに結構なことなのだが、それにつれて、地元の人たちが、ますます

裏方になってしまっている。これでいいのだろうか」

という声が、私の耳にも、ときどき入ってきていることである。

お稲荷さんも、そう思っているのではないかなー、と、思つたりもするのだが：

## 尾崎先生が車椅子で

「百里弁護団長の尾崎陸先生も「初午まつり」によくきててくれた。

その、尾崎先生が、一九九四年には、車椅子に乗つて参加したので、私たちは、体調をかなり崩されているのではないかと心配をした。

しかし、百里弁護団を代表してあいさつに立つた尾崎先生は、立ち上がるときには、多少は人の手を借りたけれども、いつもと変わらぬ声で、格調の高いあいさつをして、私たちの心配を、そのときは、一応うち消してくれたのだつた。

百里弁護団というのは、基地反対の住民側（裁判では被告側）にたつて、百里裁判をたたかつた弁護団である。

百里裁判は、百里基地建設予定地の真ん中に位置する土地——いまの、管制塔と滑走路との中間——の所有権を、基地建設に反対する住民と、国との間で争つた民事事件である。

たたかいのなかで、住民側は「違憲の自衛隊基地建設のための国の土地取得は無効だ」と主張し、裁判所に「憲法で自衛隊を裁け」と要求した。

この裁判は、百里弁護団という大弁護団が組織されて、水戸地裁から最高裁まで、三十一年間もの永い期間にわたつてたたかわれたのであるが、裁判の結果は、水戸地裁、東京高裁、最高裁とともに、自衛隊の憲法判断を避け、土地の売買関係だけで、国側を勝訴させる判決をおこなつた。

この、憲法裁判をたたかつた百里弁護団の団長が尾崎陸先生である。

尾崎先生は、名目だけの団長ではなかつた。自らも公判廷に出て、陣頭にたつてたたかつた団長であつた。

公判廷で裁判官が、裁判の不当な運営や進行をしたり、あるいは、しようとしたりした場合には、よく、尾崎先生の出番となつた。

尾崎先生は、戦前に裁判官の経歴ももつてゐる法曹界の長老である。その大先輩から多数の傍聴人がいる前で、裁判のやりかたについて、とやかくいわれるのであるから、とかく権威を示したがる裁判官については、尾崎先生はいやな存在だったにちがいない。それを口コツに表したのが、石崎政男という裁判長（水戸地裁の一審の最後の裁判長で、一審判決を出した）であった。私たち傍聴人には、そうみえたのである。

石崎裁判長は、尾崎先生が訴訟進行の不当性を指摘し始めると、顔を法廷の天井にむけて、

ネコ鳥のように（傍聴者のなかにそう言つた人がいたのだ）、田の玉をギヨローリ、ギヨローリと動かし始める。

その様が、いかにも「おれは聞く耳もたんぞ」と、虚勢を張つてゐるようみえるので、私たち傍聴者は腹が立つてたまらなかつた。

しかし、さすが、尾崎先生は、そんな石崎裁判長の態度など意に介せず、まるで子弟にでも教え諭すように、正しい裁判のあり方を説いてきかせるのだった。

その、堂々たる貫禄と弁論に接してると、石崎裁判長の態度か、スネてゐる子供のようみえてきて、怒つていた私たちの腹の虫もしだいに治まり、溜飲も下がるのだった。

こんな場面が、百里裁判のなかでは何度もあつた。

尾崎先生は、車椅子で「初午まつり」に参加したわずか二ヶ月後に、帰らぬ人となつてしまわれた。その悲報に接したとき、私は、しばし呆然とした。

——あの初午祭のときに、尾崎先生は、自らの死期が近づいていることを、知つておられたのだ。だから、最後にもう一度百里原の現地を見ておくために、百里原のたたかいに参加している人たちと最後の別れをするために、病魔に侵された身体にむち打つて来てくださつたにちがいない——

私は、そう思つたからだ

## かみだのみ

百里のお稻荷さんが鎮座してから三十九年になる。

お稻荷さんは、毎日、毎日、騒音をあびせられていても「うるさい」とはいわない。頭を下げる前に前を素通りする人がいても、文句ひとつ言つたことがない。

三十九年間もの間、なにをしてきたのだろうか、なにもしてこなかつたのだ。神様だからなにもいわず、なにもしないで、だまつて基地の真ん中に鎮座しつづけてきたのである。

だが、振り返つてみると、ばあちゃん、かあちゃんたちは、ここで楽しい一日をすごして、明日からのがんばる力をたくわえた。

百里のたたかいが苦しいときに「初午まつり」に集まつて來た支援の人たちは、反対同盟を励まし、さらに支援の環をひろげるためにふんとうしてくれた。

いまでは、「初午まつり」に数百人の人たちが集うようになり、ここでしか会えない仲間たちとも、お神酒を酌み交わしながら喜怒哀樂を語り合えるようになつた。そしてなによりも嬉しいことは、毎年、毎年、新しい参加者が増えていることである。「初午まつり」が、百里原のたたかいと平和を守る運動の、ひろがりをつづけていく場になつてゐることである。かつて、山西きよさんら、愛町同志会の幹部たちが、百里原にお稻荷さんを祀つたときに、

— 基地に反対する仲間たちの集まる場がほしい。お稲荷さんを祀って「そのようどいろにしたい」という願いは —

そのときどきのお祭りの行事や、集まって来る人たちの顔ぶれは変わりながらも、着実に実を結んできているのではないだろうか…

私は、このことに、かつての愛町同志会のはしぐれの一人として感謝したいと思うのである。

そして、これからも百里のお稲荷さんに、仲間たちが集まる、その「よりどい」になりづけてほしいと願っている。

これが、私の『かみだのみ』なのである。



## 憲法九条と掲げて

## 百里裁判のたたかいへ